



美幌峠

# 座談会 「今後の地域展開への期待と展望」

北海道の雄大な自然環境を生かし、地域との協働により沿道景観の向上と活用などを図る「シーニックバイウェイ北海道」は、本年度から本格的な制度としてスタートしました。本連載ではこれまで5回にわたり、取り組みの背景と目的、制度の内容、米国におけるシーニックバイウェイ事情、各ルートでの具体的な取組み事例と課題などを紹介してきましたが、今回の座談会では、これらを踏まえ、活動団体における意識変化と課題、今後の地域展開への期待と展望を語っていただきます。

### ポテンシャルを活かして

#### 北海道で壮大な実験を

**奥平** まず石田先生から、モデル検討委員会での議論や活動についてお話をいただきます。

**石田** 以前から、北海道は日本全体のために貢献できる自然と人のポテンシャルをもった地域だから、実験的な、面白い、新しいことを何かやりましようと呼びかけていました。それがシーニックバイウェイという形で実現したことがとてもうれしい。

二年前のモデル検討委員会発足当時は、日本全体としては美しい国づくり、協働型・参画型の道づくり、観光振興をどうするのかというようなことが非常に大きな問題になっていました。それに対し、「シーニックバイウェイ北海道」の、地域が主役になって、行政は墨子に徹し、北海道、地域を元気にするというコンセプトで、その中心にシーニックをおき、景色、文化、歴史、自然などの地域資源を結び、地域主体でいるんな人がいるんな形で連携しながら元気いっぱいやっていこうという取組みはびつたりだと思いました。

当初、「シーニックバイウェイ」というカタカナ言葉は不評でした。なぜ日本語を使わないのかということですが、いろんな人が、いろんな想いでこれに手を挙げてくださっている。新しい言葉でいろいろな想いを受け止めたいということ、シーニックバイウェイというカタカナ言葉にこだわってみようじゃないかと進めてきました。

#### 提案型ではなく、地域主体の実践型

**奥平** 各ルート代表の方々から参加の動機についてお聞きします。

**古谷** 一つ目は、シーニックの説明会で地域外の人から、こんな観光資源があつてこんな自然があるいいところなのという、私たちが普段

あまり意識したことがない言葉に、そういう可能性のある地域ならやってみいのでないかと誘発されたこと。二つ目は、これまでも地域おこしや町おこしをやってきた人は多いのですが、自分で本当に汗を流すとか、自分でやってみる機会があまりなかった。それがシーニックにはあるということ。三つ目は、経済的にも疲弊して未来が描けないこのとき、どんなメニューでもいいから飛びついてみよう。その三つが大きな動機です。

**菅野** シーニックの説明を聞いたうちの町長がぜひやりたいということで町役場の担当者に花を飛ばしていたこと。もう一つは、私たちが花を植えていた「花人街道二三七」という道が主でやっていた活動が尻すぼみになり、国道に花を植えたいということでシフトしつつあったこと。途中で抜けてもいいからエントリーだけはしてみようというのが動機です。上富良野町からはルート最多の4団体がエントリーしています。

シーニックバイウェイの前身は、実はわれわれも住民も分らず、今も試行錯誤です。

**高谷** 中身は分らなくても、これまでの日本や北海道の既存組織とは違い、地域の観光組織とも違って広域で動けそうだなと感じました。オホーツク（網走支庁）は行政単位で26市町村、あまりに広すぎてそれを一緒にマネジメントするのは無理があるのではないか、そこで斜網（斜里網走）をひとつくりにして、その資源を有効活用する東オホーツクという新たなブランドづくりの活動を始めていたところでシーニックに出会い、これだと新しい町おこし、新しい地域力を高める仕組みができるのではないかと、面白そうだ。今までだと自分たちの思いを実現できそうにないけれど、こういうわけの分からないものだ、逆にできるかもしれないと



石田 東生氏  
筑波大学大学院教授  
(元北海道におけるシーニ  
ックバイウェイ制度導入モ  
デル検討委員会委員長)



古谷 和之氏  
ニセコ羊蹄再発見の会  
WAO理事長

思いました。今までの町村単位の地域振興や観光振興では物足りないという気持ちとちよつとうまく合ったという感じです。

**奥平** 実は行政サイドの変化の方がひよつとしたら大きいのではないかと気がします。最初は私たち開発局の出先機関も含めて、認識なり、力が本当に足りなかった。それが今はずいぶん変わり、むしろ自分の管内には卵すらないと焦って一生懸命卵探しをしているぐらいです。

**やりたい人がやり、他の人は足を引っ張らない**  
**奥平** さて、各ルートでは多くの活動団体が参加されていますが、これまでやってきた中でどのように変わってきたか、あるいはどうマネジメントされてきたかをおうかがいします。

**菅野** これまでは基本的には行政から提案されたものをこなしていくというやり方が主でしたが、シーニックではあくまでも地域が主体的に提案していかないとプロジェクト自体が動かないことです。個別の見識を持つ活動団体をどう融合させ、連携させるかというところが変わってきました。私どものルートでは、各分科会からの代表者で運営委員を形成、その多種多様な個性派が月に2回から4回一堂に会し半日かけて議論し、建設的な意見ではないマイナスイテ思考の話題はすぐ却下するというやり方です。賛同者は賛同者だけで行動します。賛同できなくても反対はしない、足を引っ張らない、ということが暗黙のルールとして出来上がってきたと思います。黙っていても人の批判をしない、悪口も言わない、言いたいことがあれば本人に直接言うようになった。いろんな認識の人たちがいますから、あくまでも興味のあることを楽しんでやってみようという第一。あとの苦勞はやりたいたいことと資金。自主財源をどう作るのか、経営的な観点からどう運用していくのかということですが、今の一番の苦勞でしょうね。

**奥平** あまりマネジメントしようとは思わない方がいいのではという話と、やりたい人がやって、他の人は足を引っ張らないというのを目からうろこのような話だったですね。

**シーニックへの認知がプライドに**

**古谷** やっていることについて、周りの人や行政、特に身近に接している役場、そのへんの理解を得られることも、活動に対する栄養源です。そういう意味では、去年9月の活動月間が、私どものエリアでは大きな転機でした。あれで地域の人もこういう活動なんだとおぼろげながら感じ、シーニックバイウェイが世間で認められた時なのかなと感じています。あれ以降はなぜかうまくいっています。例えば、会社でシーニックといえば、ああ一生懸命やっておいでという感じです。汗もかいたし、血も流しました。その代わりに、誇りをみんな身につけたようです。活動団体同士の連携なんて、私自身も考えていなかったしライバルとは思っていません。それがだんだん世間に認知されて、自分自身のプライドになってくると、自分を殺して、自分たちの会を殺して違う団体とも歩み寄れる余裕が出てきました。それが大きな変化です。

**高谷** 私どもは、半年ぐらいで一気に立ち上げてから動き出したので、他のモデル地区と違い、ボトムアップじゃなく、上からという形で役員会を中心に動いてきたのが実態です。したがって、活動団体メンバーがみんな中身を知っているとは思いません。もともとぼわつとしてわけの分からないところが面白いところで、自分たちで形を作っていく楽しみの方が多いと思っています。だから苦勞はあまりない。活動団体も35団体にもなると思っています。活動団体もそれぞれ活動をお互いに知り合うだけでも大したもの。まったく隣のことを知らないのが、あ

る日突然、隣の活動が見えてきて、そんなことやっているのか面白そうだね、私も行って参加してみるかということができるだけで十分と思います。活動の情報を流しますが、参加の強制はしません。それからやはり、世の中に認められ、名前が売れてきたことにはすごく大きいと思います。それには行政も広報も含めたバックアップの力が大きい。今はシーニックという言葉で行政も周りも理解を示すので、自分たちがやっているシーニックという言葉が一つのバッジのように輝いて見え始めたという感じがしています。

**草の根民主主義が大前提の「草を育てる種」**

**奥平** 委員会では相当紆余曲折があつて今の形になったわけですが、石田先生から制度設計の苦勞とこれがおすすめというところをお願いしています。

**石田** 最初は活動団体が本当に手を挙げてくれるのかという不安がすごくありました。また、地域のなかでも根っこにある思いは同じでも、アプローチや活動内容が違うとかということがありますから、行政と地域の方とで本当に会話ができればいいのかな、コミュニケーションできるだろうかという懸念もありました。しかし、そこは最初に住み込み状態でリソースセンターが実によくやってくれた。活動団体も、開発局も本当に頑張っていた。そのときに重要だなと思つたのは、活動団体への支援をどうするか、その支援も単に金銭的なものだけでなく、一緒に悩むという、そういう支援のあり方を追求できたことで、今の形があると思っています。また、一緒にやりたい人はこの指とまれの公募方式をとつたということが、今の自由で活発ないい形になっているのだからと思っています。ただ、まさにスタートしたところで、一部の方に相当な負担がかかっています。そういう意





羊蹄山



コーディネーター  
奥平 聖氏  
国土交通省北海道開発局  
開発監理部次長  
(シーニックハイウェイ北海道  
推進協議会幹事長)



高谷 弘志氏  
オホーツクホーストレッキ  
ング研究会会長



菅野 順二氏  
深山峠観光開発振興会

味では、古谷さんと一緒にアメリカで見聞した支援の形はスマートでいい参考になります。シーニックハイウェイでは、道づくりとか、まちづくりに対するコミュニティからの試みであり、アメリカでは草の根民主主義のプロジェクトだという考え方のもとで、草を育てる種、「シーンドグラント」の補助金を渡しています。無条件でもらえるわけではありませんが、いい発想のプロジェクトには補助金を出し、それを地域が自由に使い、それが見事に転がっているという気がしました。支援センターが有限責任中間法人として立ち上がりましたが、その活動のあり方が残された仕事かもしれないと思います。

**無理をしない、サステイナブルがキーワード**

奥平 新しい難しいことをやる時、無理をしない、サステイナブル(持続可能な)がキーワードです。自分がやりたきやればよいというスタンスは非常に大事だと思います。アメリカのシーニックハイウェイでの自己診断の最初の問いは「楽しんでるか?イエス、ノー」です。

高谷 とにかく無理をしないというのが私たちのスタンスですから、10年かけてもいいというぐらいの気持ちでいます。だから逆にいうと楽しいです。私はスローライフを楽しむために網走に移住してきましたが、関係する団体は35団体あり、毎週何かに参加させてもらっています。からスローライフとはかけ離れて忙しいです。でも、お会いする方がたくさん増え、これは楽しいです。そうはいっても、活動には資金が必要で、せっかく連携したんだから、将来の地域の連携したコミュニティビジネスにつながるようなものにしていければいいと思います。また、今まで個々ではまったく見えなかったものが、活動によって他の人に見えてきて、人から認められたり、分かってもらえる、それは楽しいことです。

古谷 地域懇談会をやるといったら、一週間前から憂鬱になります。でも終わった充実感がすごい。それはやはり好きなことをやっているの、強制されていないんだということでしょう。また、ボランティアでゴミ拾いを何回かやって思ったのですが、やる前は義務でやるものだと思っていたのですが、やってみると楽しいです。小さいゴミまで捜し、こんなのを見落としてとか、そして今だったらこのこの地形ではここに、人よりいっぱい集めようとか考えて楽しんでる。視察の方にみんな自慢げに話してしまたでしょう。あれは自分のやってきたことへの誇りとかそういうものではないでしょうか。

**ボランティアとビジネスの境界が少しあいまいになってきているから楽しい**

菅野 本当に好きなことでは、自分の思いが具現化することのプロセスが楽しい。お金があればどんな事業でも短期間でできてしまう。お金がなければ、時間をかけてゆくりやれば必ず実現する、無理しないでやってくださいとお願ひしています。ただ、われわれのルートでは、例えば一つの事業を個人的にやっている方がこうしたなかで知り合った経営者の方と横つながり連携し、違った形でビジネスが発生してきているというのがいくつかあります。皆さんとお付き合いすることが自分の身にも返ってくる。それで自分の思いが具現化できる。ボランティアとビジネスの境界が少しあいまいになってきているから楽しいのかなというところまで少しは出てきました。それともう一つは、今まで小さくその地域だけでやってきた活動が広域になったために、自分たちにはないツール、例えば情報発信とか、運搬、人の動員力だとかが連携によって容易に手に入るようになったことが大きな変化ですね。ですから、みんなが逆に焦りすぎていて、自分の思いを早く具現化したい、シ

ーニックによれば早く具現化できるんだという錯覚が出てきて、抑えるのがつらい。

**広域的な情報発信と地域資源の再発見**

奥平 苦勞もあるけれど、それなりに楽しんでおられるようですね。メンバー以外の参加者の評価や北海道観光に欠けるといわれるホスピタリティの醸成につながるエピソードがあればお願いします。

高谷 私たちのエリアでは知床が世界遺産に指定されたのですが、それだけでは一極集中で駄目になってしまふのではないかと不安が私たちの心の中にあり、広域的なシーニックはまさに適切な取組みだと思います。そこで、ビューポイント探しツアーをやりましたが、地元の人ですら全然知らないことがたくさんある。まさしく地元においても再発見です。ましてそれは当然管外の人は知らないわけですから、今までのガイドブックにないところに来て地域の声を聞けて、地域を味わったということが楽しいんです。「東オホーツクシーニックマップ」もシーニックでできたのです。今までは町村単位ですから、広域でああいう情報を落とし込んだものはすごく評価が高いと思います。

菅野 うちのルートは旭川から占冠まで一本道で、一日で回れる観光エリアです。旭川から美瑛、美瑛から占冠まで、広域エリアの観光連盟や観光協議会が個々に広域マップを作り、なおかつ市町村単位のマップもある。マップの多さでは道内でも有数。それは全部公益的な資金で作られている。私たちは、観光客の視点からは一枚でいい。資金もその半分で行きたい。活動範囲が広すぎるのも欠点の一つかもしれないが、ネタをいっぱいくれる人が出てきているというのも外部からの評価がもたらまません。



深山峠

団体は自主的に今までどおり自由にやっていただ

活動は地道に」です。菅野 われわれのこれからの挑戦としては、モデルのときから引張ってもらっていたリソースセンターからの脱却で、そうしないと自主性がなくなっていくのではないかと思います。個々の活動



シーニックデッキ in くつつちゃん駅前

奥平 卵がひよこから親鳥へと、シーニックバイウエイルートがどんどん増える。私は北海道全域をシーニックバイウエイで埋め尽くして、北海道人はどこにいても参加できるルートがあるようにしたい。「静岡県といえば富士山」、「北海道といえばシーニックバイウエイ」と全国に普及させ、東アジアやヨーロッパ、オーストラリア、世界中からも、北海道のバイウエイを見たいといわせるようにしたい。「夢はでっかく、

### それぞれの挑戦

石田 自分身楽しい。このプロジェクトに参画してから、地域の団体の方と深い知り合いになっていきます。私自身にとってもいい財産になっているし、皆さんと話すことが楽しい。楽しくないと長続きしません。地域の人が笑顔でないといと観光客だって来て面白くないという気がする。地域の人が歯を食いしばって苦しい顔をしていたら、来た人だって暗くなります。そういう効果は非常に大きい。最近よく使わせていただいているのは「シーニックバイウエイとはワッショイ」だ。いろんな人が楽しみながら自分たちの味を出してそれが一つの形になっていく、盛り上がりながら一つのところに納まっていく、楽しいお祭りです。



ゴ・ミ・ゼロ 5・3・0 キャンペーン (上富良野)

### 地域の人が笑顔でないといと観光客も面白くない

く。われわれは分科会自体の強化を図る。分科会をまとめ上げる運営事務局の資金も含めた強化、事務局がリーダーシップを持つて永続的にやる組織化をするため、法人格にしていく。組織的に自主財源を作れる手法、今年に記念切手を作ったが、今後は公的、公益的な事業は助成を受けながら一緒になってやっていけば、多少の資金は調達できるだろう。三つ目は、スポンサー探しも含めて、当ルートの基金を設立できないだろうか。その基金は出資者には金利をつけて返してもらおう。ただし、プロジェクトに對しての初期部分の資金調達しからない。これから2年から5年ぐらいの間に実現させたいと活動しています。

### 古谷 私たちのエリアは支笏湖、洞爺、ニセコ

と三つに分かれていて、それぞれ特徴があり、よく分けてくれたと思います。去年、ニセコで事業をしているオーストラリア人に出演してもらい巡回の広域連携フォーラムをニセコ、洞爺、支笏湖で開催し、非常に反響がありました。要はニセコだけではパイが小さい。スキーを十日間もやるわけがない。温泉にも行きたいし、札幌にも小樽にも行きたい。その中に洞爺とか支笏湖にも分散できる選択肢を入れる。実際にはもう動いている。各地域が持ち味を生かして融和させ、補いあえば、今後は自然に連携の役割を果たす。利害や生活が絡んだ連携というのは一番強いと思います。

### 高谷 候補ルートの釧路湿原・摩周・阿寒は、

東オホーツクルートに隣接している地域です。個人的な考えですが、組織を固めるとか形を作るよりは、むしろいつでもドッキングできるアーミーバのような軟体でいたい。釧路湿原・阿寒・摩周ルートが立ち上がれば、うまく一体化して、世界遺産の知床と、釧路湿原・阿寒などの国立公園・国定公園を含めたものすごい財産

になり、東北北海道というイメージができると思っています。これができれば、今ある行政の垣根をも越えられるとわれわれは思っています。これから新しく出るルート地域には、人的支援も含めてどんどん応援したい。例えば女満別空港からウトロまで、車と自転車と馬車と歩きで二泊三日ぐらいの実証実験のような事業も考えていますので、阿寒地区と組み合わせて一体化すると片道ルートじゃなくてグルッと円が描ける。こんなものは世界にもないと思います。

### 奥平 確かに東オホーツクの指定の絵を見ると、知床半島がまっぶたつになっていて違和感がありますね。早くこちら側も仲間に入ればいいという気がします。

石田 シーニックバイウエイは、九州、関西、関東でも始まりましたが、先行者の意味で北海道は非常に注目されています。九州からの視察者に聞くと、ああいう熱い人がやっている、やっぱりすごいですねと感心される。その人たちがどう探すのかという、行政の人なんかはそういう思いで帰られるわけです。そういう感覚がすごく大切だと思います。苦労したこと、こういうふうにしたと思うことを、これからは伝えるという役割が重要になってきます。また、依存しすぎは良くないですが、やはり専門家に任せる方が、情報や知恵を持っていますからうまくできる事がある。その意味では支援センターはさらに充実強化が必要です。

### 奥平 第一回指定の3ルートの皆さんには、

シーニックバイウエイの先導者として、ますます頑張っていたきたいと思っています。本日はありがとうございました。